

聖藩文庫蔵曾我物語卷十二零本について(二)

— 頼朝、畠山父子の死 —

黒 田 彰

一一

小論は、拙稿「聖藩文庫蔵曾我物語卷十二零本について」(愛知県立大学「説林」36、昭和63年2月)を承けるもので、加賀市立図書館聖藩文庫蔵、曾我物語卷十二(外題「鐔府雜記」)の内、源頼朝、畠山重忠重保父子の死を述べる、他本には見られない、聖藩本独自の三章段について、概観しようとする。聖藩本に関しては、上記拙稿を併せて参照されたい。

一

目録を一見すれば明らかのように、聖藩本には、他本にない三箇条の記事が含まれていた。「曾我の母むなしく成し事」に続く、「頼朝御遠行の事」「重忠鶴ヶ岡にこもる事」「しげやすゆひのはまにて軍の事」である。ここでそれらを紹介し、若干の検討を加えてお

くことにする。母の往生に次いで語られる、頼朝最期についての聖藩本の本文は、次の通りである。

「頼朝御遠行の事」

さるほとに、建久十年つちのとの未正月十一日の夜、頼朝ふしきの夢をぞ御覽しける。たとへは、若宮の御てんの杉、二にさけて両方へなき、あともなくして夢さめぬ。頼朝ふしきにおはしめし、はかせに御たつねありければ、さすか御身のうへとは申さず、かまくら中の大ひやうらんとぞ申あくる。あんのことくに、おなしく十三日のとらのこくに、よりともふしきの事に、御年五十三にてうせ給ふ。是はきたひの事なりとて、人々色々に申けれども、夜かの事なれば、しんきはさらになかりける。かくてねんかう、正治元年とそあらたまるなり

曾我物語において源頼朝が占める位置の大きさについては、今更再

説するまでもないし、太山寺本の如く、卷二を頼朝蜂起譚に絞ろうとする本さえある①。聖藩本が卷十二で頼朝の死を語ろうとするのは、「頼朝十三の歳、伊豆國にながされてをはしけるに」（大系本卷二）「頼朝、伊藤にをはせし事」（以下に展開する頼朝譚を帰結させるもので、より直接的には卷二「盛長が夢見の事」と呼応している）。「有名な政子の夢買いと夢見、また、盛長の夢見は、来たるべき頼朝の出世を、目出たい夢として象徴化したものだが、面白いことに、「盛長が夢見の事」では、恰も盛長の夢を裏付けるかのよう

と、頼朝逝去に関する言及がある。頼朝の死を廻っては諸説があるが、よく知られているのは、相模川橋供養の帰途、頼朝の落馬とその死を記す吾妻鏡（建暦二年二月二十八日条）であろう。保暦間記では帰途、義経や安徳帝の怨霊が現れたと言う。興味深いのは御伽草子「さがみ川」で、橋供養のさ中、怨霊に一旦取殺された頼朝を蘇生させ、怨霊を退散させる人物として畠山重忠が登場する。聖藩本でも後述の如く、頼朝の死を廻って畠山が登場するのである。但し、聖藩本の、頼朝の夢とその死については、他に所見がない。敢えて類話を上げるとすれば、『唐糸さうし』に次のような挿話がある。

左殿、きこしめして、大きによろこび給ひて、頼朝、この暁、不思議の霊夢をかうむりつるぞや。虚空より山鳩三きたりて、頼朝が髻に巢をくい、子をうむと見つるなり。これ、しかしながら、八幡大菩薩のまぼらせたまふと、たのもしくおぼゆるとおほせられければ（岩波日本古典文学大系）

夢に寄せて語り出された頼朝の出世であり、聖藩本が、対する頼朝の他界を、夢に寄せて語り斂めようとするのも頷けよう。但し、夢の内容は当然彼は吉、これは凶となる。なお真名本盛長夢見の条（卷三）には、

鎌倉殿取_{下ッ}世_上、持_上日本_上二十九年、申_下廿年_上正治元年有_上逝_下

次の年の正月二日に、鎌倉殿の常に御祈念をなさるゝ、しゝの間の御座敷に、小松六本、壘のへりに根をさし、生へ出でたるこそ不思議なれ。頼朝大に騒がせ給ひ、かやう成草木は、土にこそ根のさすに、壘のへりに根をさし、生い出でたるこそ不審なれ。鎌倉中のわづらひか、又は頼朝が身の上か。博士を召せとの給ひて、その頃鎌倉中に、隠れなき、安倍の中もちと申博士を召されて、問はせ給ひける。いかにや中もちうけ給はれ。常に祈念するしゝの間の座敷に、今夜の内に、小松が六本生出でたり。鎌倉中のわづらひか、頼朝が身の上か、天下の乱れか占へとぞ仰せける（岩波日本古典文学大系）

また、聖藩本「重忠鶴ヶ岡にこもる事」「しげやすゆひのはまにて軍の事」と密接な関連を有する、後述御伽草子「いしもち」では、重忠の母がやはり凶夢を見る。

そのまたつきのゆめには、ちよふのたけか二つにわれ、ふたひちうたいつたわりたる、ひをとしのよろいかさんくけにきかれし、こころへすにみへつるなり、よきゆめやらん、いかにまた、あしきつけにてさふらうか、あわせてたへや、をのく、女はうたちとおほせける（上冊⑥）

ところで、聖藩本は頼朝の死を畠山に絡ませて理解していたようだ。続く二章段を見てみよう。

二

〔重忠鶴ヶ岡にこもる事〕

爰に、ちよふはたけ山、当番衆の事なれば、なにとちんし給ふとも、くわうたう一同のしゆきになはずして、手勢其外九十三騎、其外さうひやう壱万六千にて、まつ鶴ヶ岡にたてこもり、たとへは近國のしゆこ、國のたみにいたるまで、雲霞のこくとくはせあつまり、つるか岳をかためける。

〔しげやすゆひのはまにて軍の事〕

かのはたけ山には、大力の子息二人あり。ちやくしは六郎重安、二男は池上次郎しげきたなり。かの二人の人、武けいのたつしやは、関東にならひなし。二なんいけかみは、父と一所につるか岳に籠。ちやくしの六郎しげやすは、てうやさかりして、是をもしらす。女はたそとたつぬれば、かまくらたうついの人まるなり。かの人まるのこせきは、をわりの國、あつたの大官司かまこなり。父をたつぬれば、平家侍大将に、悪七兵衛景清なり。景清源氏のせめをかうふり、子どもをさしころし、ときに此人まるは二歳なり。是はひめにてましますとて、みつからに給はれといひて、めのと、いたきてにけにける。おもひの外にたすかり給ふ。めのと、かまくらたうついの、ちやくかいもうとなり。是も、よつてかまくらへくたり、たうついにせいちやうする。父きやうのためとて、まゆげしやうをせされは、はしろのまへとを申ける。見めようかん人にすくれ、和哥の道にもならひなき、たう辻のあら人丸とを申ける。六郎かれにさいあひして、父の大事をしらす。かまくら中のわひさうするをきけは、我身のうへの事なりければ、とるものもとりあへず、つるかおかへいらんとそす。妻の人まる是を見て、此門外よりあなたは、みなかたきにて候へし。物のくめされ候へとて、かろうとをかき出し、さくらおとしのたうまるの、

わたかみつかんで、さつくときくたしゆつて、上帯しつかとしめ、九寸五分のよろいをとし、ま一もんしにさすまゝに、しときつはの太刀をはきそへ、このむ所の大長刀さやをはつし、こゝからりとすて、駒引寄うちのかりて、出行すかたそきいとなる。女はあまりのかなしさに、れん中にひきこもり、ふししつむこそ哀なれ。さるほとに、かまくらのせい、六郎かたう辻にあるをしり、父一所になきしとおもひ、たう辻の道すから、くしのはのことくとりこめんとす。六郎これをはものともせず、さん／＼にうちほらひ、ゆいのはまへ出にける。たゞ袋の中に入かことし。うしろをきつと見候へは、らうとうこものはみなうたれて、我身はかりになりける。これまでなりとおもひ、くんせいのなかへ、しんみやうをすて切入ければ、あきのことくさへたる軍兵とも、四方八方へはつとちる。このまゝにきりはらいて、つるか岳へいるへき、若武者のかなしきは、かけつ返しつたゝかひければ、うちものいかてこらへへき。つはもとをれてのきにける。つかをかしこにうちすてゝ、しときつはの太刀をぬき、さん／＼にきりめぐり、太刀もいかてかこらへへき、はゞきまわよりをければ、せんかたなくしてかたなをぬき、ひきよせ／＼さしころす。かたなもいかてこらふへき、三つにおれてのきければ、かたきのうちものをもきとり、切め

くる。千に一ものかるへきを、若武者のふこうにて、力を人にみせんとおもひ、人をつかんでなけめくる。まつこゝをなけおとされて、おりかさなりて死ぬるもあり。大はんしやくになけあてられ、かうへをうちくたかれて死ぬるもあり。人をつかんで、ひうち合といふものにうちくたきて、すつるもあり。かうにする所に、やつきはや、てたれとも、はせあつまりおかさなり、いきをくれすたゝかひければ、伯太わうかいりもいかならず、鬼王のせい力つき給ひて、とりのいははにてうちしにして、なを、はんでんにあげ給ひけり。つるか岳にては力をおとちうせにけり。一まん六千のそのせい、三千はかりになりけり。しかりとは申せとも、身にかはるほどの老たうとも、しんりやうをすてゝそ戦けり。せんとやすりのことくにて、その念中はらつきよせず。あくる年の正治式年のかのへさる六月廿三日に、しけたゝはらきり給ひけり。さてこそ、あつまの大ひやうらんはしつまりぬ。手をい、しにんのみやうしちやう、筆すみにもおよひかたし

聖藩本、標題以下の「鶴ヶ岡」は無論、二俣川古戦場として名高い鶴ヶ岡（横浜市旭区）の誤解である。さて、聖藩本が、「爰に、ちゝふはたけ山、当番衆の事なれば、なにとらんし給ふとも、くわう

たう一同のしゆきかなはすして」「くわうたう一同のしゆき」は未詳だが、「関東一同の衆議」か」とするのは、頼朝の死に際し、当番衆を勤めていた畠山が、その責任を問われたということだろう。

この一文を理解する上で参考となりそうな記述が、御伽草子『よりとまさいこの記』、『はたけ山』にある。

しかるによりともは、そのうち御とし五十三にてけんきう十ねん正月五日に、はたけ山の六郎どの御しよのばんを申に、よりともしつとかたにて、御女ぼうのすがたをまなびいで給へば、これをはたけ山どのあやしめまいらせられ、ひきよせつきころし申せば、あつとばかりおほせにて、御しよへ御かへりむなしくならせ給ひけり。しからは御しよ中、みだい御れん中、よりともの御たかいをいかにもおんみつにて、御きんじゆ、しよ大みやうにも御かくしありて、しばらく人もしらずしていつものごとく大ばん小ばんのしゆ、又につばんこくのしゆ、ざいかまくらのしゆも、みなくもんぜんいちのごとくほうこう申。しかれどもうたがひおほくありければ（『よりとまさいこの記』⑥）抑、正治二年正月一日の日、みなもとの頼朝よしなき事にうせ給ひし、其らんしやうをたつぬるに、ある時、頼朝のきたの御かた、御物語のついでに、らい朝におほせけるハ、御内におほき取に、扱もちふの六郎わきまきょうの物かな、日本一のおの

ことゆるしたるもたうりなりとの給へハ、らい朝きこし召、心のうちはかりかたふやおほしけん、俄に若宮にさんろうの由あつて、みたい所の御はんをはちふの六郎一人に仰つけさせ給ふ、しけやす承、われ一人に女中の御番を承る事、ふちんのいたり是なり、にちや隙なくしこうす、さる間、頼朝ハよになれハ、しやてんのひろひさしに忍やかにあからせ給ひ、しろき絹をかつき、爰かしこをみたまへは、女房達御らんして、しやてんの上に化しやう有と、曰くるれハさながらにたちおのくかせ給ひけり、みたいきこし召、六郎をめされ、ふしきなり、化しやうの物有、はらへとの御錠なり、しけやすうけ給、紫糸緒はらまきに八方みかきのはつよりき、ちふの家 heavyweight にかうひらといふたちもつて、ひろえんによもすからとのゐをしてそゐたりける、さる間、頼朝やつむねつくりのひさしをひらりく々とひ給ふ、しけやすこれを見て、すハや化しやうの物有、くみとめはやとねらひしに、ひさしの上の事なれハ、さすかてにはたまらず、きらてハとめかたしと、四しやく二すんのかうひらをつかなかにおつ取のへ、吹あわせのひさしをとひたまふ所をおとりあかつて、ちやうときる、ゆんてのものきわよりも、つくと切てそおとしける、大事のてにてましますハ、たまりもあへす落給、しけやすとつておさへて、さしころさんとし

けれハ、頼朝にておはします、しげやすとひきまつて、ふちんしてこそゐたりけれ、らい朝御らんして、いかにしげやすよ、なんちかあやまりさらになし、唯らい朝かひか事そ、人をめせとの給へハ、しげやす承、いかに人々御まいりあれ、君の御ちやうと申せは、我もくと参りつゝ、君をみ付奉、俄に御しちやうしんとうし、鎌倉うちのみありさまハ、あらしに落はのちりかさなつて、吹みたれたることくなり……栄花やつきぬ五十三、あしたの露ときへ給ふ、生死無常の世の習、誰かハひとりのかるへき、らい朝むなしくなり給へハ、大名小名ないき評定取くなり（『はたけ山』⑩）

両書によれば、重保が御所の番、御台所の番をしていて、誤つて頼朝を傷つけ、その傷が元で頼朝は死ぬことになる。こういった説を念頭に置けば、聖藩本の記述も或る程度了解されるが、しかし、責められるのが重忠らしいこと、その他不審も残り、聖藩本が「よりともさいごの記」「はたけ山」等を承けたとも考えにくく、先後関係は不明としなければならぬ。ともあれ、以下聖藩本の述べる山父子の最期が、「よりともさいごの記」また、「はたけ山」「いしもち」と深く関連していることは間違いない。例えば聖藩本に、重忠の「手勢其外九十三騎」とするのは、「いしもち」に、「はたけ山……そのせい九十三きときこへたり」などと見えるし、聖藩本に、

「其外さうひやう壺万六千にて」とするのも、『はたけ山』に、「くんきやうのつわ物一万よき」など見える（吾妻鏡元久二年六月二十二日条「百三十四騎」）。そこで、聖藩本「しげやすゆひのはまにて軍の事」と上記三書との関連等、二、三気の付いたことを述べておく。

「しげやすゆひのはまにて軍の事」は、「かのはたけ山には、大力の子息二人あり。ちやくしは六郎重安、二男は池上次郎しげきたなり。かの二人の人、武けいのたつしやは、関東にならひなし。二なんいけかみは、父と一所につるか岳に籠」と書出されるが、子息二人の「大力」については、「いしもち」の母が重忠に語った言葉に、「さこそ御みのまふけたるしげやすと、こ二ちかちからのほとは、りうのすゑさこそおもひしられたれ」などとある。また、次男が父と行動を共にするのは、「いしもち」「はたけ山」でもそうなっているが（吾妻鏡も同）、聖藩本の「池上次郎しげきた」は未詳である。次男は小次郎重秀で（吾妻鏡、千葉上総系図等）、「はたけ山」の、「かのしげ忠のおとゝに、いけかみの五郎とてみゝしゐのをしあり」、「いしもち」の、「さていけかめはかたはもの」と関連があるか。『はたけ山』には、「しげ忠のしなんおくたの二郎」とある。

父、弟が苦境に陥った時、重保は塔辻（鎌倉市小町）の愛妾の所

にいた（「てうやさかりして」は、「朝夜酒盛して」か）。聖藩本に書留められた人丸伝承は、大変面白い。

女はたそたとつぬれは、かまくらたうつしいしの人まるなり。かの人まるのこせきは、をわりの国、あつたの大官司かまこなり。父をたつぬれは、平家侍大将に、悪七兵衛景清なり。景清源氏のせめをかうふり、子ともをさしころし、ときに此人まるは二歳なり。是はひめにてましますとて、みつからに給はれといひて、めのと、いたきてにけにける。おもひの外にたすかり給ふ。めのと、かまくらたうつしいし、ちやうかいもうとなり。是も、よつてかまくらへくたり、たうつしいしにせいちやうする。父きやうのためとて、まゆけしやうをせされは、はしろのまへとそ申ける。見めようかん人にすくれ、和哥の道にもならひなき、たう辻のあら人丸とそ申ける

景清の女人丸については、僅かに謡曲『景清』中にその所伝を見る。

人丸これは鎌倉亀が江が谷に、人丸と申す女にて候、さてもわが父悪七兵衛景清は、平家の身方たるにより、源氏に憎まれ、日向の国宮崎とかやに流されて、年月を送り給ふなる……

シテ只今の者をいかなる者ぞと存じて候へば、この盲目なる者の子にて候ふはいかに、われひと年尾張の国熱田にて遊女と相馴れこの子を設く、女子なればなにの用に立つべきぞと思ひ、

鎌倉亀が江が谷の長に預け置しが（岩波日本古典文学大系）この人丸に關しては従来他に徵証がなく、「仮作の名」（大系本頭注）とか、「架空の人物」（新潮日本古典集成頭注）とかされており、聖藩本の記事は実に珍しい。人丸が尾張の熱田で生まれ、後鎌倉の宿の女主人の許で成長するという点、兩者には密接な関連が認められよう。但し、人丸の預け先が、聖藩本では「たうつしいしちやう」、謡曲では「亀が江が谷の長」と違っているし、何より人丸の母を、聖藩本が熱田の大官司の女とするのに対し、謡曲は単に熱田の遊女とする点、聖藩本が謡曲を引いたものとは思われない。そして、景清が熱田の大官司の女との間に子を儲けた点に限り、むしろ幸若舞曲『景清』の、

彼景清と申は。色好みのおの子にて……尾張の大官司の三の姫に契りをこめ。是も十年に成と承……大官司聞召れて……孫は我子の子なれとも。子寄も孫は不便なり……我子と孫の不便なれば。それかし此儘切る共。景清をたすけん

などとする⑩所伝と関連がある。しかし、幸若舞曲には人丸そのものが出てこないものであるから、無論聖藩本が幸若を見た訳ではないだろう。聖藩本は、人丸が他の兄弟と共に景清に殺される筈の所を、塔辻の長の妹に命を救われたと言ひ、また、父孝養のため齒白で通し、「はしろのまへ」と呼ばれたとし、さらに、人丸の呼称の

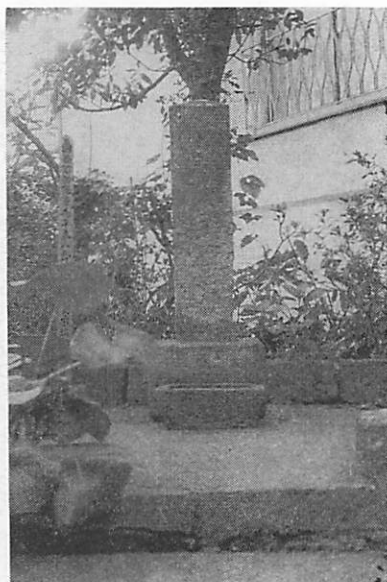
罰れを、「和哥の道にもならひなき、たう辻のあら人丸」と明かしている点^⑥等、謡曲や幸若の所伝よりも、遙かに詳しいのである。聖藩本の、「景清源氏のせめをかうふり、子とをさしころし」などと言う説が逆に、幸若の阿古王の子殺しへと展開したのかもしれない。ともあれ、聖藩本の人丸譚は、例えば謡曲研究の立場から、「景清」の直接の典拠も明らかでないが、日向における落魄の生活、遣見人丸のことなど「平家物語」とは異なる景清譚に基づいているらしく（新潮日本古典集成解題）と言われる景清譚の一環に当たり、中世における謡曲や幸若の景清伝承を裏付ける、同根の貴重な資料であると判断して良いだろう。

さて、重保は人丸に気を取られ、父の苦境を知らず、市中の狼狽するのを聞いて、漸く事の次第を悟る^⑦。そして、人丸の勧めで武装を整え、塔辻を出陣する。重保が塔辻から立出つのは、聖藩本では人丸の許にいたからだが、「いしもち」でも、「しげやす御らんして、にんあひせはくて、此たちはかけあひのいくさかなふましと、をのゝこまをうきのつて、たうのつしをうつて、ゆいのみきわの大とりのひたりのわきにちんをと、よせくるせいをまち給ふ」「たうのつしへ御入ある、かまくら入のましゝてはとかくの事にうちまされ、ゆふへはけさにはやうつれは……たうのつじをうつたつて、ゆいのはまゑいて給ふ」と言う。ところで、聖藩本は重保と

人丸との恋仲を記し（「妻の人まる是を見て」とも言う）、恰も十郎と虎との關係を思わせるが、重保と人丸の関わりを述べた資料は、聖藩本の他未だ管見に入らない。しかし、聖藩本の記述が古伝であろうことを推測させる、断片的な証拠が皆無という訳でもない。鶴岡八幡宮一の鳥居西側に、明徳四（一三九三）年建立の重保塔と言われる宝篋印塔があることは有名である。一方、こちらは余り知られていないが、人丸塚と呼ばれる遺蹟があって、例えば新編鎌倉志五に、「人丸塚ハ、巽 荒神ノ東ノ方、畠ノ中ニアリ。悪七兵衛景清ガ女メ、人丸ト云者落也ト云伝フ。景清ガ女ヲ亀谷ノ長二預シトナリ。此辺亀谷ノ内ナリ」と言う（鎌倉物語一には、「人丸屋敷」とも）。そして、当地を訪れた万里集九は、文明十八（一四八六）年十月十八日の日乗として、次のような文句を書き留めている。

望人丸塚於山嶺、指六郎之五輪於路傍（梅花無尽蔵二）

これは明らかに人丸塚と六郎の五輪とを対にしたもので、何故この二つが組み合わされなければならないのか、聖藩本の如き伝承を前提として、始めて説明することが出来るのである。梅花無尽蔵の記述は、聖藩本に語られた重保人丸譚が、少なくとも室町中期以前へと溯る古伝であることを窺わせよう。



人 丸 塚

塚壇（左、鎌倉市小町）と碑（右、大町安養院内）

さて、塔辻を出た重保を、鎌倉勢は取籠めようとする。重保はそれを打払い、由比が浜へ到る。聖藩本には、「うしろをきつと見候へは、らうとうこものはみなうたれて、我身はかりになりける」とあるが、重保の勢は、『いしもち』に「七き」（吾妻鏡「郎従三人」）、『はたけ山』に「七千よき」とし、やがて重保ばかり残るのは変わりがない。

「畠山六郎ユイノ浜合戦」（看聞御記）の場面からは、二点程その特徴を上げておこう。まず第一に、重保の太刀などがまるで用をなさなかったこと。聖藩本は以前に、重保が鎧通し、藁^{しごもつは}鍔の太刀、大長刀を帯びて出陣したことを言うが、それらは全て、

かけつ返した、かひければ、うちものいかてこらへへき。つはもとをれてのきにける。つかをかしこうちすて、しときつはの太刀をぬき、さんくりにきりめぐり、太刀もいかてかこらへへき、はききわよりをければ、せんかたなくしてかたなをぬき、ひきよせしころす。かたなもいかてこらふへき、三つにおれてのきければ、かたきのうちものをもきとり、切めくる

という有様であつた。これは『いしもち』の、

さるあひた、わかみやより、うの花をとしのよろいきて、かうしくりけにのつたりけるむしや一きかけいてたり、しげやす御らんして、たそやなれとおほせけり、あわのくにのちう人に、さくまの太らとしなをなり、うけてみ給へしげやすとて、もつてひらいてちやうとうつ、しげやす此よし御らんして、心へたりとの給候て、大殿よりの御ちうたい、いしまりと申御はかせをまつかうにさしかさし、すきまもなくうち給へは、なにとかありける、うち物かめぬききはよりほつきとをれ、そのみはくわつとぬけなから、かいしやうまきつふといつたりけり、しげやすこのよし御らんして、かたきのむまにのりならへ、さくまかうわおひかいつかみ、めされたるくらのまゑはにひきあてんとし給へとも、さくまもきこゆる大ちから、あふみをつよくのりけるにや、ぬしかあかれは、むまともに二三と四五とあかりけり、しげやす御らんして、くひをかゝんとおほしめし、あたち殿よりまいりたる、かいらきつくりのさやまきをぬかんくとし給へとも、御うんのすゑか、此かたな、おりかねくりかたはらりともし、さやともにこそぬけたりけれ、さてもしげやすかやおいにのりかゝり、くひねちきつて、かいしやうへさんふとなけいれ給ひて、さくまかなきなたをつとつてないてまい

らせ給へは、あたりへかゝるつわ物ののかれんやうはなかりけり、かすかきなれば、うち物もさのみはいかてこらうへき、二つ三つにそおれたりけり

とある所に該当する。さらに取藩本a、「かたきのうちものをもきとり、切めくる」は、『いしもち』a、「さくまかなきなたをつとつてないてまいらせ給へは」が対応しよう。「はたけ山」には童女が登場し、「しげやす今ハちからなく、はらきらんとおもへとも、りう女のなせるわきなれハ、たちも刀もぬけうせぬ、おほてをひろけ待いたり」とある。『いしもち』の当箇所について、徳田和夫氏は、「それにしても六郎の太刀が目抜き際より「ほつきとをれ」、また、鞘巻が「ぬかんく」とし給へとも、(略)さやともにこそぬけたりけれ」としたのは、『いしもち』独自の趣向であろうか。それとも、他の文献に見出されるもので、室町期からの伝承なのであるうか」として、田植草紙「腕哥壺はん」中の、

畠山六郎殿のさいたるたちにこそな

千両斗のかねはかゝりたり

かたなには二おう三郎たちにわひせんかねみつ

六郎殿のさすかはゑそのつきおれ(91番)

を上げ、「田植草紙」がいう、突き折れてしまった刺刀(腰刀の短刀)とは、六郎伝承の一つ、まさに『いしもち』が語る佐久間と

の一騎打ちの場面を刀に象徴して歌ったものに他ならない……従って、この歌謡の存在からも、『いしもち』の語るところは室町期からの伝承と推定されるのである」とされる^⑥。しかし、『いしもち』で折れたのは太刀であり、鞘巻ではない。鞘巻つまり刺刀は折金と栗形が取れ、鞘から抜けなかったと言うのみで、細かくは田植草紙の、「六郎殿のさすかはゑそのつきおれ」と合致しない。田植草紙とよく照応するのは、むしろ聖藩本の、「太刀もいかてかこらへへき、はゝききわよりをれければ、せんかたなくしてかたなをぬき、ひきよせくさしころす。かたなもいかてこらふへき、三つにおれ

てのきければ」の方であろう。ここで言う「かたな」とは、前に九寸五分の鍔通しとあった如く、正しく刺刀なのである。重保の太刀刀が物の役に立たなかったことは、やはり室町期以前の古伝であろう。そして、それは『いしもち』独自の趣向などではないこと、徳田氏の述べられた通りで、氏の推測された「他の文献」の存在の一つとして、ここに聖藩本を上げて良いだろう。なお、重保が「あたち殿」から件の鞘巻を拝領する『いしもち』の挿話について、氏は、「『平治物語』巻中の六波羅合戦の、武藏国の金子家忠と同国住人の足立右馬允速元との間の替太刀譚を明らかに利用しての詞章に他ならない。これも原物語に当初からあったとは思われず、語り物化され、また奈良絵本の三冊本として出現した時に付加された部

分であろう」とされているが、この挿話も聖藩本にはない。

第二に、重保の人飛とびのこ。聖藩本また、『いしもち』「はたけ山」では、打物を悉く失った重保が素手で幕府軍に立ち向かう。聖藩本には次のようにある。

千に一ものかるへきを、若武者のふこうにて、力を人にみせんとおもひ、人をつかんでなげめくる。まつこゝゑなけおとされ、おりかさなりて死ぬるもあり。大はんしやくになげあてられ、かうへをうちくたかれてしぬるもあり。人をつかんで、ひうち合といふものにうちくたきて、すつるもあり

これは、『いしもち』の以下の部分と明らかに関連する。

はらかたよりはなやかにいてたつたるむしや一き、かけてたり、しげやす御らんして、たれなるらんといい給へは、むねわうまるとなのつて、しげやすのゆんでにこまをかけならへ、くまんとす、しげやすはすきもなく、むねわうか上をひむすとかんて、ゑいやといふてなげ給ふ、くも井をうかつ大とりむをはるかになげこし給いて、はんゑかためたる七百よきのくんひやうのまん中にうちこまれ、みちんとくたけてうせにけり、かたきのつわものこれを見て、すはや、しげやすの人つふてこそはしまりたれ、あしうよつてうたるなとて、かゝるものこそなかりけり……かたきはこれを見るよりも、いまはかうそやかゝ

れとて、大せい出ければ、みてにつくつてかためたるはまおもての御しよせいか、くもかすみのことくかけあわせ、みたちを中におつとりこめ、ひみつになれともうたりけり、いたはしや、しけやすはかゝるかたきをさうにうけ、ゆんてめてへなけ給ふ『はたけ山』にも、同様の記事が見える。

しけやす此よしみるよりも、ちかつく物をさるわひに、引よせてねちころし、かひつかんでゑひとハなげ、人にて人を打ころす、ゆんてめてにてなくなる事、紅葉のちることくなり、あしをとつてひつきき、うてをとつてひきぬき、ゆひのはまにて、しけやすかてにかゝつてしする物、三百七十よ人なり

また、『よりともしさいごの記』の、次の一段にも注意する必要がある。

あはのさくま、あふぎのしやくにて六郎にちかくよりければ、六郎が心えてとつてつかんで大とりゐのかさぎへうちあげたりしかば、さくまも大ちからにて、こしかたなをぬきあしをかさぎにからみ、したをにらみてゐたりけり

「人つふて」の語こそ見えないが、聖藩本の記す所が、重保の人飛礫伝承であることは間違いない。重保の人飛礫については、看聞御記応永二十六（一四一九）年七月十五日条に、

夜山村念仏拍物有風流。畠山六郎ユイノ浜合戦人礫ノ体ヲ作

また、同二十九年七月十五日条に、

石井風流畠山六郎。人飛礫之体作之

などと見え、それが室町初期以前からの古伝であることを、徳田氏は指摘されている。「むねわうまる」（「いしもち」）や「あはのさくま」（「よりともしさいごの記」）といった固有名詞を記さぬ点、どちらかと言えば聖藩本は『はたけ山』に近そうだが、それらはいずれも同根の古伝より出たことが確実で、聖藩本もその古伝を保っていることに注目しなければならない。

かく大力を誇るさすがの重保も、衆寡敵せず討死する。聖藩本は、伯太わうかいらもいかならず、鬼王のせい力つき給ひて、とりいのははにてうちしにして、なを、はんでんにあげ給ひけり

と記すが、重保が「とりいのははにてうちしにして」（「はは」は、^端か）とあるのは、前述重保石塔に関する、数少ない資料の一と言つて良い（「いしもち」には、「ゆいのみきわの大とりゐのひたりのわきをちんにとり」とある）。「伯太わう」「鬼王」は、幸若舞曲『夜討曽我』等に、「さまむ國のきわう。らせむ國のらわう。鬼をからめしはくたわう」など見える（「はくたわう」は、「白沢王」〈禁秘抄他〉から出るとされるが、未審）。さて、重保の討死を明記する点、聖藩本は「いしもち」とのみ合致する。「ユイノ浜合戦」（看聞御記）が高名であったためか、重保と由比が浜の結び付きは

強く、重保が由比が浜から竜宮へ赴き、九穴の貝を取る異伝を生じている。幸若舞曲「はま出」「九けつのかひ」、謡曲「九穴」等がそれである。そして、「はたけ山」「よりとまさいごの記」はその趣向を取入れており、重保は討死するのではなく、最後に竜宮へ行ったとされている。この点、聖藩本は両者とは隔り、「いしもち」とのみ共通する結尾を有することになる。

聖藩本は以下、重忠の最期を記す。重忠敗死の様は、「はたけ山」に詳しく、聖藩本の簡略な語り口はそれには遙か及ばないが、「しけたゝはらきり給ひけり」と言うのは、「はたけ山」と一致する（吾妻鏡では、重忠は愛甲三郎季隆の矢に当たり首を取られてゐる）。『いしもち』には重忠最期が欠けていること、徳田氏が不審とされた如くである。ところで、聖藩本は上述来の重忠重保譚を、その念中はらつきよせず。あくる年の正治弐年のかのへさる六月廿三日に、しけたゝはらきり給ひけり。さてこそ、あつまの
大ひやうらんはしつまりぬ

と締括る。重忠父子が誅戮されたのは、実はその五年後、元久二（一二〇五）年六月二十二日のことである（吾妻鏡等）。すると、聖藩本は、時を六年繰上げて正治元（一一九九）年に、しかも実際は一日の出来事を、翌正治二年に及ぶ大兵乱に仕組んでいることになる。これは何を意味するかというと、まず曾我の母の亡くなった

のが、正治元年のことである（真名本巻十に、「正治元年（元久二年）五月廿八日申（には）剋、曾我の女房被（は）遂（は）大往生」とある。但し、聖藩本等「十郎母二ノ宮あね大磯え尋行事」に、兄弟死後「七年に当るほとに」、「七年きにあたり候へは」とあるのからすれば、正治二年か）。次に、頼朝の死んだのも正治元年（一月十三日）、さらに畠山重保が討死したのも同年中である。また、翌正治二年には重忠が割腹している。つまり、正治中の曾我の母の死に同元年の頼朝の死が配され、さらにその頼朝の死に引付けて、畠山父子の死が可成り強引に繋がれている訳である。このことは聖藩本が、母の死を契機軸として、頼朝と畠山父子の死の、謂わば年代記構成を試みたものと考えて良いだろう。

四

「頼朝御速行の事」と同様、聖藩本の「重忠鶴ヶ岡にこもる事」「しげやすゆひのはまにて軍の事」が他本に存しないことは、既述の通りである。聖藩本独自の上記三箇条に関する紹介を終えるに当たり、最後に、聖藩本が有する畠山譚の意味を、少し検討しておきたい。曾我物語において、畠山氏が占める比重の大きさは、これもまた、贅言を要しまい。真名本、仮名本を通じ、畠山重忠が常に曾

我兄弟を庇護し続ける位置にあり、殊に仮名本にあってそれが圧倒的に強化されていることは、山西明氏の論攷に詳しい^⑩。例えば、巻四「源太、兄弟めしの御つかひにゆきし事」以下の章段を想起しても良い（真名本なし）。幼い曾我兄弟は、頼朝によって処刑を命ぜられる。危く殺されかけた兄弟を救ったのが、畠山重忠である。

頼朝は他の有力御家人梶原、和田等の助命嘆願には、決して耳を貸そうとしなかったから、重忠がいなければ、兄弟は十一歳、九歳の時死んでいたことになる。そして、仮名本で重忠が重みを増すにつれ、嫡子重保も脚光を浴びていることに注意すべきであろう。例えば、巻八「富士野の狩場への事」における射手揃えを見ても、「まづ武藏國には、畠山庄司次郎重忠……若侍には、畠山二郎重保」（大系本）と、筆頭に上げられるのは畠山父子である。また、重保は同巻の鹿論にあって、一方の立役者とされている（真名本なし）。仮名本曾我物語において、頼朝に次いで、重要な地位を付与されていたのが畠山であることは、論を俟つまい。聖藩本は、構造上物語を支えてきた二本柱である、頼朝と重忠の死を記すことによつて、物語終息のより完璧化を図つたものと思われる。曾我兄弟を物語の心臓に譬えるならば、頼朝と重忠はそれを支え支える諸器官に当てられようか。頼朝の死は、真名本に一部触れる所があつたが、重忠の死を述べる行為も、仮名本の甚だしく畠山に傾斜した姿勢からし

て、さして不自然とばかりは言えまい。むしろ頼朝、重忠の絶対化が進んだ仮名本からすれば、自然であるとも言えよう。また、例えば平家物語の末巻と灌頂巻とのあり様を見ても、聖藩本は、十分推測可能な曾我末巻の異本の形であることが、納得出来る。

聖藩本と他本との最大の相違は、頼朝の死、畠山重忠、重保合戦を内容とする三章段の有無にある。聖藩本は、虎と曾我の母を軸とした後日譚である他本とは異なり、そこに頼朝と畠山父子の死を含む。さて、曾我物語巻十二と平家物語灌頂巻との密接な関係は、後藤丹治氏その他により、指摘されて久しい。構想上また、素材面から見て、巻十二が灌頂巻の強い影響下にあることは一見明らかだが、しかし、従来からのアポリアが一つそこにあつて、例えば、巻十二が灌頂巻に做つて作成されたとする時、巻十二は灌頂巻に対応せず（灌頂巻は第十三巻目）、まず巻教的に辻褄が合わなくなつてくる。そこで、「『平家物語』の巻教が、『曾我物語』の巻教に、直接的な影響を与えていると考えることには躊躇せざるを得ない」^⑪とか、「仮名本曾我物語の十二巻編成をなした最初の者は、それほど十二又は十三という教にこだわつていたとは思われない」^⑫とか言われるのも、或る意味では当然であろう。巻教への影響を排除してまで、巻十二と灌頂巻との関係を考えなければならぬのは、構想上の類似が余りに歴然としていたためである。巻十二が虎関連記

事から成るのは、恰も灌頂巻が建礼門院関連記事から成るのと軌を一にし、他の要素の介入する余地がない。しかし、聖藩本の場合は違ふ。独自の三章段は、虎と関係のない他の要素なのである。つまり聖藩本は、虎関連記事と他の要素とから成っている。今、聖藩本が他本に先行すると仮定してみよう。すると、聖藩本が己れの姿を似せたのは、灌頂巻ではないだろう。建礼門院関連記事及び、他の要素を含む、換言すれば、覚一本以外の平家物語巻十二ということになる。そして、前述のアポリアは解消し、構想と巻数が対応一致するだろう。ところで、曾我物語巻十二の背後に見え隠れするのは、果して所謂灌頂巻なのであろうか。この問題は、さらに稿を改めて検討することにしよう。

それにしても、聖藩本「頼朝御遠行の事」以下、三章段の内容についての興味は尽きない。取分けその畠山譚は、注目すべきものであろう。畠山譚を扱った資料は存外に少なく、前述、二、三が知られるに過ぎない。その内、「いしもち」「はたけ山」を世に出されたのは徳田和夫氏であったが、聖藩本はそれらと密接に関連しつつ、人丸譚を含む等、さらにまた、別系の畠山譚と思しく、今後の考究が俟たれるのである。徳田氏は、「いしもち」が「畠山物語四巻」(定家筆「兵範記」紙背)を原物語とする可能性を指摘されている。すると、聖藩本の畠山譚も当然、「畠山物語」の系譜に連な

ってくるだろう。例えば真名本曾我と、「治承物語六巻景平」の後裔たる四部合戦状本平家物語との関連は、周知の事実である。そして、仮名本曾我の巻十二は、「畠山物語」の末裔に連なっていた訳で、それはまた、巻十一以前の畠山譚の出所に関する議論を惹起するだろう。

一休の自戒集に、

エトキカ琵琶ヲヒキサシテ、鳥帯ニテ、アレハ畠山ノ六郎、コレハ曾我ノ十郎五郎ナント云ニ似タリ

とあり、絵解の貴重な資料であることを、早くに指摘されたのは、岡見正雄氏であった。徳田氏はこれを、重保と「景季との鹿論の場面としておくのが妥当なところであろう」と言われる。鹿論は成程、曾我物語中絵となりそうな唯一、重保の活躍する場面であり、しかも五郎十郎の登場が想定し得るから、説得力に富んだ説となっている。只鹿論ならば、景季の名の記されない点が、不審と言えは言えようか。では、自戒集の、「アレハ畠山ノ六郎、コレハ曾我ノ十郎五郎」は、聖藩本の如き、畠山重保譚を含む曾我物語巻十二を下敷にした絵と考えたらどうか。聖藩本「しげやすゆひのはまにて軍の事」は、「十郎五郎を虎夢に見し事」へと続き、重保及び、十郎五郎が登場するのである。重保は無論、由比が浜合戦の絵であるから、一人で構わないであらう。

注

- ① 村上學氏『曾我物語の基礎的研究—本文研究を中心として—』（風間書房、昭和59年）
- ② 徳田和夫氏『いしもち』（『国文学未翻刻資料集』所収、桜楓社、昭和56年）に拠る。
- ③ 『よりとともさいごの記』（市古貞次氏『未刊中世小説』2所収、古典文庫18、昭和23年）に拠る。
- ④ 徳田和夫氏「内閣文庫蔵『はたけ山』」（『幸若舞曲研究』2所収、三弥井書店、昭和56年）に拠る。
- ⑤ 笹野聖氏『幸若舞曲集』（第一書房、昭和18年。臨川書店、昭和49年）に拠る。
- ⑥ 徳江元正氏は、「娘の人丸という「景清」のツレはその背後に遊女の唱導といおうよりも明石に鎮座する人丸明神系統の首僧の語り物からの影響も考えられるかもしれない」と言われる（『乞冑景清—幸若舞曲と題目立—』、『文学』46・4、昭和53年4月）。また、江田皓司氏は、曾我物語卷十二の背景に「女語り」を想定されている（「仮名本『曾我物語』卷第十二の成立について—手越の少将の性格を中心に—」、『中世近世文学研究』17、昭和59年11月）。
- ⑦ 徳田和夫氏は、申楽談儀に言う「初若の能」が、『いしもち』

- の原話を利用して作られた田楽能ではなかったかと推定された（「畠山六郎重保の伝承と語り物—畠山の物語—と奈良絵本『いしもち』の諸問題—」、学習院女子短期大学『国語国文論集』10、昭和56年3月）。聖藩本の重保譚は、申楽談儀の、「子を勘当しける」に当たる筋もなく、「初若の能」とは関係のないものと思われるが、只、「親の合戦すと聞て、由比の浜にて合戦して」（申楽談儀）という点は、聖藩本と重なることを指摘しておきたい。即ち、『いしもち』の場合、「親の合戦すと聞て」と申楽談儀に記すようにはなっておらず、逆に、父の重忠が子の重保の合戦を聞くとなっていて、申楽談儀と一致しないのである。徳田氏も一考された点であるが、『いしもち』とは別に、重保が「父の大事」を聞く形の重保譚も、中世行われたであろうことは、聖藩本によって確認出来よう。
- ⑧ 徳田氏注⑦前掲論文
 - ⑨ 山西明氏「曾我物語在地性の変容と保持—畠山氏説話を中心として—」（『国語と国文学』61・2、昭和59年2月）参照。
 - ⑩ 江田氏注⑥前掲論文
 - ⑪ 村上氏注①前掲書
 - ⑫ 岡見正雄氏「絵解と絵巻、絵冊子—近古小説のかたち（続）—」（『国語国文』23・8、昭和29年8月）参照。